

**[A年] 降誕前第9主日(2024年10月27日)****【旧約聖書日課】 箴言 8章1節、22～31節**

## 1 知恵が呼びかけ

英知が声をあげているではないか。

## 22 主は、その道の初めにわたしを造られた。

いにしへの御業になお、先立って。

## 23 永遠の昔、わたしは祝別されていた。

太初、大地に先立って。

## 24 わたしは生み出されていた

深淵も水のみなざる源も、まだ存在しないとき。

## 25 山々の基も据えられてはおらず、

丘もなかったが

わたしは生み出されていた。

## 26 大地も野も、地上の最初の塵も

まだ造られていなかった。

## 27 わたしはそこにいた

主が天をその位置に備え

深淵の面に輪を描いて境界とされたとき

## 28 主が上から雲に力をもたせ

深淵の源に勢いを与えられたとき

## 29 この原始の海に境界を定め

水が岸を越えないようにし

大地の基を定められたとき。

## 30 御もとにあって、わたしは巧みな者となり

日々、主を楽しませる者となって

絶えず主の御前で樂を奏し

## 31 主の造られたこの地上の人々と共に樂を奏し

人の子らと共に楽しむ。

**【使徒書日課】****ヨハネの黙示録 21章1～4節、22～27節**

1わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。

最初の天と最初の地は去って行き、もはや海も

なくなった。<sup>2</sup>更にわたしは、聖なる都、新しい

エルサレムが、夫のために着飾った花嫁のよう

に用意を整えて、神のもとを離れ、天から下っ

て来るのを見た。<sup>3</sup>そのとき、わたしは玉座から

語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕

屋が人の間にある、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、<sup>4</sup>彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のもは過ぎ去ったからである。」

<sup>22</sup>わたしは、都の中に神殿を見なかった。全能者である神、主と小羊とが都の神殿だからである。<sup>23</sup>この都には、それを照らす太陽も月も、必要でない。神の栄光が都を照らしており、小羊が都の明かりだからである。<sup>24</sup>諸国の民は、都の光の中を歩き、地上の王たちは、自分たちの栄光を携えて、都に来る。<sup>25</sup>都の門は、一日中決して閉ざされない。そこには夜がないからである。<sup>26</sup>人々は、諸国の民の栄光と誉れとを携えて都に来る。<sup>27</sup>しかし、汚れた者、忌まわしいことと偽りを行う者はだれ一人、決して都に入れない。小羊の命の書に名が書いてある者だけが入れる。

**【福音書日課】****マタイによる福音書 10章28～33節**

<sup>28</sup>体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。<sup>29</sup>二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。<sup>30</sup>あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。<sup>31</sup>だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。」

<sup>32</sup>「だから、だれでも人々の前で自分をわたしの仲間であると言い表す者は、わたしも天の父の前で、その人をわたしの仲間であると言い表す。

<sup>33</sup>しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、わたしも天の父の前で、その人を知らないと言う。」

## 「聖書協会共同訳」（2018年版）読み比べ

## 箴言 8章1節、22～31節

- 1 知恵は呼びかけていないか。  
英知は声をあげていないか。
- 22 主はその道の初めに私を造った。  
いにしえの御業の始まりとして。
- 23 とこしえより、私は立てられていた  
太初、地の始まりから。
- 24 まだ深淵もないとき  
私は生み出されていた  
大いなる原初の水の源もまだないとき。
- 25 山々もまだ据えられず、丘もないとき  
私は生み出されていた。
- 26 神が、まだ地も野も  
この世界の塵の先駆けさえも  
造っていなかったとき
- 27 神が天を確かなものとしたとき  
私はそこにいた。  
神が深淵の上に蒼穹を定めたとき
- 28 神が上にある雲を固めたとき  
深淵の源に勢いを与えたとき
- 29 この原初の海に境界を定め  
水が岸を越えないようにして  
地の基を定めたときに。
- 30 私は神の傍らで腕を振るう者となり  
日々、神を喜ばせ〔直訳→喜びとなり〕  
いつの時も御前に楽しむ者となった。
- 31 神の造られたこの地、この世界で楽しみ  
人の子らを喜ばせた  
〔直訳→私の喜びは人の子らと共に〕。

## ヨハネの黙示録 21章1～4節、22～27節

- 1 また私は、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は過ぎ去り、もはや海もない。
- 2 また私は、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために装った花嫁のように支度を整え、神の

もとを出て、天から降って来るのを見た。<sup>3</sup>そして、私は玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人と共にいて、神が人と共に住み、人は神の民となる。神自ら人と共にいて、その神となり、<sup>4</sup>目から涙をことごとく拭い去ってくださる。もはや死もなく、悲しみも嘆きも痛みもない。最初のものが過ぎ去ったからである。」

<sup>22</sup>私は、この都の中に神殿を見なかった。全能者である神、主と小羊とが神殿だからである。  
<sup>23</sup>この都には、それを照らす太陽も月も、必要でない。神の栄光が都を照らしており、小羊が都の明かりだからである。<sup>24</sup>諸国の民は、都の光の中を歩き、地上の王たちは、自分たちの栄光を携えて都に来る。<sup>25</sup>都の門は、終日閉じることがない。そこには夜がないからである。<sup>26</sup>人々は、諸国の民の栄光と誉れとを携えて都に来る。<sup>27</sup>しかし、汚れた者、忌まわしいことうあ偽りを行う者は誰一人、都に入れない。小羊の命の書に名が書いてある者だけが入ることができる。

## マタイによる福音書 10章28～33節

<sup>28</sup>体は殺しても、命は殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、命も体もゲヘナ〔別訳→地獄〕で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。<sup>29</sup>二羽の雀は一アサリオンで売られているのではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。<sup>30</sup>あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。<sup>31</sup>だから、恐れることはない。あなたがたは、たくさんの雀よりも優れた者である。」

<sup>32</sup>「だから、誰でも人々の前で私を認める者は、私も天の父の前で、その人を認める。<sup>33</sup>しかし、人々の前で私を拒む者は、私も天の父の前で、その人を拒む。」

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・10月27日「降誕前第9主日」の日課主題は「創造」。日本基督教団の「新しい教会暦」は、「降誕日」前に9主日を設定し、ここから一年一巡りが始まるように定めている。これに基づいて、主日聖書日課も、この主日から始まる各年を四福音書に割り当てた4年サイクル(A年～D年)で定めている。新しく始まるA年は、「マタイによる福音書」を福音書日課として割り当てられた主日聖書日課が組まれている。

・「降誕前」節の前半5主日は、「旧約」の出来事を記念するときとして主日聖書日課が定められている。

・旧約聖書日課は、「箴言」から、「知恵」の創造について述べられる箇所。使徒書日課は、「ヨハネの黙示録」から、「新しい天と地」の創造が告げられる箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、創造の御業が被造物の細部まで臨むことを教える箇所。

**旧約日課(箴言8章より)**

・「箴言」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「諸書」の中で「エメット」の区分で扱われる格言集。本書のユダヤ教史における扱いや標題「箴言(ミシュレ)」の原義については、過去の資料「聖書と祈りの会 240724」また「同 240918」を参照。

・本書は「箴言」(格言)の蒐集としてまとめられた文書であり、必ずしもそれらを体系化した思想を提示しようとしているわけではない。そうだとすると、編集上の骨格をなす基本思想は示されている。まず基本テーマとして示されているのが、1:7「主を畏れることは知恵の初め」という句であり、ほぼ同じ句が9:10でも繰り返されている。この句が示すのは、「箴言」として語り継がれるような「知恵」の源泉が「主なる神」にある、という基本思想である。「知恵」の文化は、古代オリエント文化の中でも長い伝統があるが、本書に蒐集されている「箴言」も含めて多くの場合、「知恵」は人間の経験則として蓄積された知識を踏まえたものであり、元来、啓示や預言とはまったく異なる根拠で位置づけられるものである。本書においても、「知恵」が啓示や預言として告げられるという思想は見られない。にもかかわらず、本書の基本的な考え方は、「知恵」が神を源泉とするものである、というものである。その背景には、「知恵」を語る「言葉」に関する神学思想があると言える。旧約正典は、諸祭儀に依存して神の臨在を認識する神学に固執せず、「神の言葉」によって神の臨在を認識する神学へと軸足を移していった過程を示す文書群として解することができる。そこでは、実際には「人の言葉」として語られる言葉が、いかにして「神の言葉」たりうるかという、越えなければならない課題があった。それが可能となるのは、言葉を聞く者が、語る者に対して誠実な態度で、偏り聞くことなく耳を傾けるときである。旧約正典において、「主を畏れること」は、もっぱらこの観点へと向けられていくことになった。

・日課箇所は、「知恵」を天地創造の御業に先行して存在してきたものとして提示することによって、その源泉が「主なる神」その方にあることを示そうとしている。このような思想は、「ヨハネ福音書」冒頭に提示される「言(ロゴス)」理解と一致するものである。

**使徒書日課(黙示録21章より)**

・「ヨハネの黙示録」は、新約正典最後に置かれた啓示文書。書名は、冒頭句「イエス・キリストの黙示」(1:1)による。「黙示(アポカリュプシス)」は、他の新約文書では「啓示」と訳される語。本書の著者は、自ら「僕ヨハネ」(1:1)と名乗っているが、この人物が「使徒ヨハネ」か、「ヨハネの手紙二・三」の「長老」か、あるいは別人か、ということが常に問題にされてきた。2世紀の教会教父らの中には、これを「使徒ヨハネ」とみなす者もあるが、他方で同時代に、「もう一人のヨハネ」つまり「長老ヨハネ」と解する者もあった。本書1章に描写される著者の姿が教会伝承における「使徒ヨハネ」の生涯と一致するという言説もあるが、教会伝承そのものが本書を元にしていない可能性が高い。著者の問題と共に、本書の内容の解釈を巡って、古代教会では本書の扱いが長く議論されてきた。西方教会(ローマ)では、4世紀末にローマ帝国でキリスト教が国教化されたのに伴い開催された「カルタゴ会議」(397年)で決定された正典表に加えられて議論が終結したが、東方教会では中世末まで議論が続き、最終的には正典に数えられながら、現代でも慣習的に礼拝で朗読されることはないままである。

・本書の書名を「啓示録」と訳さず「黙示録」と訳すのは、本書のような文学類型を「黙示文学」として扱う習慣に関わる。英語版でも、本書名を「リベレイション(啓示)」とする場合と、ギリシア語音訳で「アポカリュプシス(黙示)」とする場合がある。「黙示文学」は、旧約の「ダニエル書」などに典型的に示される文学類型のことで、啓示によって天上世界で繰り広げられている出来事を示された者が、それらを視覚的描写をもって物語る形式で展開される。また、そのようにして示された出来事が「終末」についての予示であるとの解釈が施され、「預言」ではなく「予言」として『聖書』を解釈する伝統を引き出してきた。しかしながら、旧約の預言書がそうであるように、本書も、遠い将来のことを予示するために著されたわけではなく、現在著者や読者が置かれている現実をどのように信仰に基づいて解釈するのかということ、過去の「言葉」伝承に基づいて展開しているものである。本書の言説の多くも、旧約正典各書を出典とした描写や表現である。

・日課箇所は、信仰者に示されている目的地として「新しい天と地の創造」が描かれる本書最終部分(21～22章)の一部。そこで示される情景は、「創世記」1～2章の天地創造譚などで描写される「被造物があるべき姿」に基づいている。つまり、創造の御業に基づく「あるべき姿」を回復すること、すなわち「再創造」が、本書で示される「救済」である。

## 福音書日課(マタイ 10 章より)

・「マタイによる福音書」は、新約正典の最初に置かれた福音書。「マルコ」および「ルカ」と共に「共観福音書」と称されることがあるのは、内容構成の類似性による。現代の聖書学者は、最初に作成された「マルコによる福音書」を下敷きに、それぞれの教会の事情や解釈の相違に基づいて「マタイ」や「ルカ」が作成されたと考えている(マルコ優先説)。その際、「マタイ」および「ルカ」は、それぞれの独自の資料のほかに、知られていない共通資料(Q 資料)を参照しているとも考えられている(二資料仮説)。

・本福音書は、「預言の成就」という観点を基本として、「マルコ」で描かれるような主イエスの生涯の物語を徹底的に旧約正典に典拠のある出来事として描くことを企図している。同時に、本福音書は、単に主イエスの生涯の物語を描くことだけでなく、そこに弟子たちが立ち上げた「教会」の起点があることを明示することを意図し、主イエスの教えを「教会」に対する教えとして示そうとしている(四福音書中、「教会(エクレシア)」の語が出てくるのは、本福音書のみ)。

・日課箇所は、10 章冒頭で「十二使徒」が選ばれ任じられたことに基づいて、主イエスが彼らを宣教派遣するに際して教えられたという設定の中に置かれている教えの一部。この設定に基づく教えは、10 章末尾まで続く。弟子たちが宣教派遣される際に教えがなされるという設定自体は「共観福音書」で共通のことだが、この設定枠の中に「マタイ」と「ルカ」は「マルコ」よりも拡大して教えを置いている。日課箇所の教えは、「ルカ」も伝えているが(ルカ 12:4~9)、「ルカ」の場合は、ファリサイ派に対する警戒の教えという設定の中に置かれている。「マタイ」は、前段(10:16~25)に迫害予告を配置し、宣教派遣される弟子たちが迫害を恐れない信仰に立つよう励ますために、細部にまで臨む創造主の御業を強調する日課箇所を置いている。

## 来週の誕生日 (10 月 27 日~11 月 2 日)

## 主日礼拝の讃美歌から

- ・21-8「心の底より」(= I 26 番「ころを傾け」)は、16 世紀宗教改革の時代にプロテスタント陣営の傭兵として生きたゲオルグ・ニーゲがルターの「朝の祝福の祈り」に触発されて作詞したとされる「朝の讃美歌」。曲は、民謡の旋律からの編曲。
- ・21-211「あさかぜしずかにふきて」(= I 30)は、19 世紀米国の女性作家で『アンクル・トムの小屋』の作者ハリエット・ストウの作詞。冒頭は詩編 139:18 により着想。曲は、F・メンデルスゾーンのパiano独奏曲「無言歌集」からレヴィが編曲。
- ・21-471「勝利をのぞみ」(= ㊦134 番、㊧164 番)は、18 世紀ごろから歌われていた黒人霊歌(もとは労働歌?)が原型となって 1940 年代から広く歌われるようになったと考えられている讃美歌。1960 年代のアメリカ公民権運動の中で盛んに歌われるようになり、

教会の讃美歌集にも取り入れられてきたが、近年の讃美歌集では採用されなくなっている。ワシントン大行進(1963 年 8 月 28 日)でこの歌を歌いながら行進する人々の姿が映像で記録されている。

## 21-8「心の底より」

## Aus meines Herzens Grunde

1. Aus meines Herzens Grunde / sag ich dir Lob und Dank / in dieser Morgenstunde, / dazu mein Leben lang, / dir, Gott, in deinem Thron, / zu Lob und Preis und Ehren / durch Christus, unsern Herren, / dein eingebornen Sohn,
2. dass du mich hast aus Gnaden / in der vergangenen Nacht / vor G'fahr und allem Schaden / behütet und bewacht. / Demütig bitt ich dich, / wollst mir mein Sünd vergeben, / womit in diesem Leben / ich hab erzürnet dich.
3. Du wollest auch behüten / mich gnädig diesen Tag / vors Teufels List und Wüten, / vor Sünden und vor Schmach, / vor Feuer und Wassersnot, / vor Armut und vor Schanden, / vor Ketten und vor Banden, / vor bösem schnellem Tod.
4. Gott will ich lassen raten, / denn er all Ding vermag. / Er segne meine Taten / an diesem neuen Tag; / ihm hab ich heimgestellt / mein Leib, mein Seel, mein Leben / und was er sonst gegeben; / er machs, wies ihm gefällt.
5. Darauf so sprech ich Amen / und zweifle nicht daran. / Gott wird es alls zusammen / in Gnaden sehen an; / und streck nun aus mein Hand, / greif an das Werk mit Freuden, / dazu mich Gott beschieden / in mein Beruf und Stand.

## 21-211「あさかぜしずかにふきて」

## Still, Still, with Thee

1. Still, still with Thee, when purple morning breaketh, / When the bird waketh, and the shadows flee; / Fairer than morning, lovelier than daylight, / Dawns the sweet consciousness, / I am with Thee.
2. Alone with Thee, amid the mystic shadows, / The solemn hush of nature newly born; / Alone with Thee in breathless adoration, / In the calm dew and freshness of the morn.
3. As in the dawning o'er the waveless ocean / The image of the morning star doth rest, / So in the stillness Thou beholdest only / Thine image in the waters of my breast.
4. Still, still with Thee, as to each newborn morning, / A fresh and solemn splendor still is given, / So does this blessed consciousness, awaking, / Breathe each day nearness unto Thee and Heaven.
5. When sinks the soul, subdued by toil, to slumber, / Its closing eye looks up to Thee in prayer; / Sweet the repose beneath the wings o'er shading, / But sweeter still to wake and find Thee there.
6. So shall it be at last, in that bright morning, / When the soul waketh and life's shadows flee; / O in that hour, / fairer than daylight dawning, / Shall rise the glorious thought, / I am with Thee.

## 21-471「勝利をのぞみ」

## We shall overcome

1. We shall overcome, we shall overcome, we shall overcome someday! Oh, deep in my heart I do believe we shall overcome someday!
2. We'll walk hand in hand.
3. We shall all be free.
4. We shall live in peace.
5. The Lord will see us through.